
Kid c hildren

さぎり湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K i d c h i l d r e n

【Nコード】

N 1 2 1 3 A

【作者名】

さぎり湊

【あらすじ】

主人公の橙子は高校一年生。同じクラスの角の席で、独りで音楽を聴いている男子・圭に興味を持つ。大人でも子供でもない、二人の話。

【0】prologue

何故か、惹かれた。

その男子は、他と違った、特殊な空気で纏われている。

教室の扉に一番近い席で、ただ頬杖をつきMDを聴いていた。

その顔は安らかで、この場所の騒々しさなど全く気にしていない様子だった。

他と違う。

”常にグループを形成し群れたがる高校生”とは明らかに異なつた人種である。

自ら独りになる事を好み、選んでいるのだ。

それが、私にはよく解った。

彼と私。

少なくともこの事に限って、気が合いそう。

【1】mask

「ケイ君！」

彼は耳にヘッドホンをあてて音楽に集中している所為か、私の呼び掛けが聞こえないらしい。

「…ケイ君！」

二回目。やっぱり無反応。…もしかしてシカトか？

ぐいつ、と誰かが私の肩を後ろに引っぱった。直後、耳元に空気の流れを感じた。

「そいつに話しかけない方がいーよお！？トウコちゃん、私らと同じじゃなかったから知らないだらーけどさあ、そいつ昔から何かヤバいんだって！」

私には、その男子がクラスでどう云う立場に属しているか、なんて関係無かった。

只、私は彼に興味を持った。

それだけ。

「そうなの？ちょっと気になったからさあ。MDとか」

「MDい？…まあ、一回そいつと話してみれば分かると思うわー」

気をつけなつ、とその子は私に耳打ちして、他の子の元に移った。

この一連の会話が、「ケイ君」には聞こえていただろうか。

聴いていたんだろうか。

それとも、シカト？

「…ねえ」

やっぱり返事は無く、平和そうな表情で眠りの姿勢に入っている。何故か、ムカついた。

「ねえっつー！！」

ヘッドホンの隙間から、脅かす様に声を張り上げた。

彼の体はビクッと跳ね、虚ろだった目はまるで狂犬に吠えられた時の様に、見開いてこちらを凝視した。

「……何？」

いかにも面倒くさい、と云った物言い。

「私、さつきから何度も呼んでただけど。気付かなかった？」

彼は、ピクリとも顔の筋肉を動かさない。

「……はあ。……つか、お前何で俺の事下の名前で呼ぶ訳？」

ヘッドホンを直し、MDのリモコンをいじる彼。

私の耳に微かに届いていた音楽が、完全に聞こえなくなった。

「だって、ケイ君の名字読めないんだもの。何て読むの？」

「別に良いじゃん？ そんなん。俺の事呼ぶ事なんてねえだろうし。」

……そんな事言ってもさあ。

「……今呼ぼうにも呼べなくて困ってただけど」

何処かを見ていた彼の目が私を映した。

その瞬間、目が合ったのだと気付き、私は彼のMDに目を向けた。

MDは新品なのか、かなりピカピカ。

型は古い方だ。

音楽関連の新製品は洗いざらいチェックする私だから、それは確

かだと思う。

彼は相当物持ちが良いのかも、なんてどうでも良い事を考えていた。

彼。……ちゃんと見ると、意外に綺麗な顔してて。ビックリ。

コノミ、と彼は呟いた。

「木貫圭。」コノミ”って読むの」

「”コノミ”……木貫君かあ。分かった！ 有り難う。私の名前分かる？」

「”トウコちゃん”だよな」

「うん。夕風橙子。だいたい色にこどもの子で”橙子”……よく読めないって言われる」

「ならあだ名”ミカン”で良いんじゃない？」

「……は？」

「橙色↓オレンジ↓”ミカン”」

「何それ！安易過ぎ。なら私も木貫君の事”キノミ”君って呼ぶから」

「好きにしろよ」

彼は、ぶっきらぼうに言って、少し笑った。

初めて彼と話をし、色々な事を初めて知った。

無表情な彼の顔。

よく解らない性格。

声。

笑顔。

…彼を知らない私。

彼は私を”トウコちゃん”と言った。

聴いていたのだ。

私と彼女の会話を。

彼を遠ざけるクラスメイトの言葉を。

―そして、見ていたのだ。

その言葉を叱るでもなく、彼を庇うでもない、私の態度を。

私は、知りたい。

彼の目に、私がどう映っているのか。

【2】egoism

「お前、音楽好き？」

と、彼に質問された。

初めての彼からの質問は、初めて会話をした日の放課後。教室を出ようと、彼の席の後ろまで来た時。

「うん。好きだけど。何で？」

私は何を隠そう、音楽オタクだった。

J・POP、洋楽、クラシック。

果ては音楽機器に至るまで、その事に対しては誰もが吃驚する程のマニアっぷり。

表に出している気は全く無いのだけれど。

「そんな顔してる」

彼はそう言つて、ニカツと笑つて見せた。

次の日、その次の日、そのまた次の日。

相変わらず彼は基本的に素っ気なかった。

彼も音楽愛好家らしく、それ系の話題を出せば食いついてきてくれるものの、いまいちフレンドリーと云う感じには成りきれない。

それでも、私は彼に付きまとつた。

理由？…解らない。

只、直感で”自分と同じ種類の人間だ”と思ったから。

なんとなく、彼の事が知りたくなつた。

―恋？…違うよ。

「トウコちゃんさあ、何で奴に付きまとうかなあ！？」

「え？…何でつて言われてもお」

放課後の教室。

彼に最初に近づいた時に、忠告してきた女子がイキナリふつてき

た。

「結構良い奴と思うよ？ 顔格好良いかもだし」

その子はうむと唸って、少し黙った。

やっぱり、彼女の目から見ても木貫君は格好良いらしい。私の目は腐ってはいなかった。

「でも奴さあ、マジヤバいんだって！…ヤバいつつーか、キモい」
彼女は、妙に真剣な顔でそう言った後、大袈裟に身震いして見せた。

「奴ねえ、人の心が読めんのよ…考えてる事、ズバズバ言い当てちゃうの。キモくない！？」

語尾が無駄に上がった。…超耳障りって感じい。

「へえ…本当だったらキモいって云うか私的に恐いわ」
でしょー！？と彼女は満足気に私の肩を叩いた。

彼女の話信じる気は無い。

現実的に有り得ないし。

それに。

私は基本的に誰も信じないから。

…それよりも。

彼女との会話が、彼に。

聞こえていただろうか。

聴いていたのだろうか。

それとも、シカト？

離れた場所にある彼の席を見ると、既に帰宅したらしく、無人だった。

少しホッとした。

同時に、今の会話が少しでも彼の耳に入らなかったか心配になった。

彼のヘッドホンが、木貫君の為に、ーいや、私にとって都合良く役に立っていいれば良いと、醜い事を願っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1213a/>

Kid c hildren

2010年10月9日03時48分発行